2011 年　1 月号

滑稽俳句協会会長　八木　健氏　に聞く　27

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く　19

（聞き手　高橋素子）

高橋 ＞　滑稽俳句協会のホームページ、「今月の八木健」にこんな句がありました。

小春日の空に広がり母焼く煙

大往生と吾を慰め冬の寺

年末に、御母堂様の御逝去という悲しい出来事に加えて会長も入院され、「鬼の霍乱」の様な事が起こってしまいました。本日はいつも通りにご登場戴きましたが、余りにもお忙しい毎日、何卒お身体くれぐれも御自愛くださいますよう。

会長 ＞　入院と言うのは、白内障の手術のためで、病気という程のものではありません。両眼の手術をしたので七泊八日の入院でした。その間パソコンから離れ、天国のような暮らしでしたよ。退院した今は、ホームシックならぬホスピタルシックです。

高橋 ＞　それでは、本題に入らせて戴きます。本日は前回に続いて、「夏の部の人事」からという事になりますが、ご指導よろしくお願い致します。

季語は「更衣」です。四月と十月朔日（陰暦）に宮中で夏・冬服に改めましたが、

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

「更衣」はもっぱら夏の季語として用いられていますね。

十月は「後の更衣」とも言われています。

更衣雑巾一つ出来にけり　諷竹

鴉から鷺に明けたり更衣　巴静

衣かへや鴉は黒く鷺白し　樗良

是は是は這ふ子立たり更衣　宗端

最後の句は狂言調ですね。ご解説お願いします。

会長 ＞　「更衣雑巾･･･」
捨てきれずに箪笥の肥やしになっていたものが、とうとう年貢の納め時、雑巾として余生を送ることになったのですね。

「鴉から･･･」、
つまり黒から白に、鴉から白鷺に変身したようなものだという見立ての句です。

「衣かへや･･･」、
これも同じようなものですね。

「是は是は這ふ子･･･」、
更衣を期に、それまでハイハイをしていた子に、お兄ちゃんの袴をはかせて無理やり立たせてみたのでしょう。

高橋 ＞　「ころもがえ」は、名詞の場合は漢文通りに「更衣」と書きますが、動詞の場合は読み通りに「衣更ふ」と書きますね。「更衣」は中国の言葉で、日本の衣更えの読み方をそのまま当てはめたのでしたね。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

衣更へて座て見てもひとり哉　一茶

下谷一番の顔してころもかへ　一茶

やりくつて又やりくつて更衣　鳴雪

くりくりと坊主になりぬ更衣　椽面坊

衣更へて来たよ隣の女の子　馬良

出女の誘われ顔や更衣　紅緑

この出女は、江戸幕府が定めた「入鉄砲出女」ではなくて、江戸時代、各地の旅宿にいた男性を相手にする女性のことですね。ご解説いただけますか。

会長 >　「衣更へて・・・」、
一人暮らしの一茶の寂しさ溢れる句ですが、見てくれる人もいないのに衣更えをしてと自嘲しているのです。

「下谷一番の・・・」、
下谷は東京台東区の地名ですね。江戸時代の手まり歌の「おらがねえさん三人ござる…一人姉さん下谷にござる。下谷一番伊達者(だてしゃ)でござる」。つまり、派手な服装をする者の例えですね。派手者の顔をしてということは、顔だけ派手だということで皮肉たっぷりです。

「やりくつて・・・」、
これが庶民の本音ですね。「やりくり」には質屋さんも参加しての更衣ということです。冬の間は質に入れておいて、いよいよということで質から出すわけです。

「くりくりと・・・」、
これも可笑しいですね。伸びた頭髪を切って坊主頭になることが衣更えです。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

「衣更へて来たよ･･･」、
可愛いですね。「衣更へて来たよ」は口語俳句です。見せる相手が隣のおじさんぐらいなもので、これが可笑しくも可愛い。

「出女の･･･」、
旅宿の出女と呼ばれる人が、誘われたいがために更衣をしたということですね。

高橋 ＞　次の季語は「袷」です。

紋所かはる座頭の袷かな　也有

西行は死そこなうて袷かな　蕪村

会長 ＞　紋所かはる･･･」、
座頭は目の不自由な方のことです。紋所は見えないから、あまり気にしないのですね。三味線などを弾いて芸で生活をしていて、ご贔屓さんから使い古しの羽織などをいただくわけで、紋所はそのたびに異なるわけです。

「西行は･･･」、
西行法師は平安時代から鎌倉時代にかけての歌人ですが、春に死にたいという歌を残しています。死んだのは文治六年二月十六日で寒いですから、袷を着て死んでいったというわけで、春に死に損なった･･･。こんな句を蕪村が詠んでいるとは驚きですね。

高橋 ＞　西行の終焉の地、大阪府の弘川寺に西行のお墓を訪れた時、お墓の近くの碑に歌がありました。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

ねがはくは花の下にて春死なん

そのきさらぎのもち月の頃

佛には櫻の花をたてまつれ

わが後の世を人とぶらはば

会長 ＞　二句目も西行さんの句ですか。
死してなお花見をしたい西行さん
墓前に桜の花をと強引　健

高橋 ＞　面白いですね。次の季語は「棉抜」ですよ。冬の綿入れを、温かくなると棉を抜いてそのまま着るという貧しい庶民の知恵が、あっけらかんと面白く詠まれているようです。

南無阿弥陀仏どてらの棉よひまやるぞ　一茶

立ながら棉ふみぬいて出たりけり　一茶

棉抜いて裾縫ふ事を忘れけり　紅緑

会長 ＞　「南無阿弥陀仏・・・」、
どてらの棉に「暇」をやるとは面白い擬人化ですね。

「立ながら棉・・・」、
横着な綿抜きですね。実際にはその方が具合良く抜けたのでしょう。

「棉抜いて・・・」、

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

実際にありそうな失敗ですね。私もクリーニングの整理札をつけたままの事が多いです。

高橋 ＞　やっぱり面白いご解説ですね。次の季語は「潅仏」。釈迦の誕生日、四月八日を記念して、花御堂の中に安置された誕生仏に甘茶をかける行事を、潅仏会とか花祭といいますね。

潅仏や取りあげ婆の御念仏　虚六

卯月八日死んで生るる子は佛　蕪村

御釈迦様の尻また青き産湯哉　子規

潅仏のはや黒々と痩せ給ふ　鳴雪

御釈迦様に甘茶をかけておちやか様　紅緑

会長 ＞　「潅仏や取りあげ･･･」、
誕生を祝う祭ですが、この場合はお釈迦様をとりあげた、取りあげ婆のことにしても面白いですね。

「卯月八日･･･」、
お釈迦様の生まれた日に死んで産まれた子。昔は新生児の死亡率が高く、死産も多かったですからね。

「御釈迦様の尻･･･」、
お釈迦様も産まれたては尻が青いはずという推定ですね。

「潅仏のはや黒々･･･」、
一連の句の中では鳴雪のこの句にリアリティーがありますね。つまり痩躯のお

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

釈迦様を、はや黒々としていると、古びた仏像を写生していますね。

「御釈迦様に甘茶をかけておちやか様」

高橋 ＞　うわー！紅緑は、会長お得意のジョークを詠んでますよ！

会長 ＞　紅緑には負けましたね。
お釈迦様甘茶ですべり甘茶づる

高橋 ＞　次の季語は「田植　」と「早乙女」です。

我門へ尻の近よる田植かな　也有

小便はよその田へして早苗とり　也有

夫婦していさかひながら田植かな　其角

早乙女やひとりは見ゆる猫背中　召波

会長 ＞　「我門へ･･･」、
田植は後ずさりしながら植えてゆきますから、そういうことになります。最近は機械田植で、早乙女の尻が見られず田植かな　ですね。

「小便はよその･･･」、
小便は肥料になりますが、早苗取りにはよろしくない。失礼ですよね。

「夫婦していさかひ･･･」、
夫婦喧嘩しながら田植をしている。ありそうなことです。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

「早乙女やひとり･･･」、
早乙女の一人は猫背というのですが、どこが可笑しいのでしょう。

高橋 ＞　昔の俳人は、衒いもなく日常生活を詠んでいて面白いですね。

会長 ＞　衒いもなくですが、たわいもないことを詠むのが良いのです。百八年後に、こんな風に読まれるとは思っても見なかったことでしょう。

高橋 ＞　またまた、面白いご解説有難うございました。
残念ではございますが、本日はここまでとさせて戴きます。本年も面白くて素晴らしいご解説、本当に有難うございました。来る年もお眼、お身体に、くれぐれもお気を付け下さって、益々ご活躍下さいます様お祈りしております。

平成二十三年は、「兎年」。会員の皆様方が、一層お元気が出るような「兎の句」を、ご好評の「虎造節」に乗せてお願いしたいと思います。

会長 ＞　♪走馬灯おおおお、止まれば兎いいい、ひとお眠りいいいい。見上げる月にいい兎さあん、飽かず餅搗きをりにけりいい。二兎追ふものは一兎も得ずとやらああ。平成の滑稽句を後の世に伝えるためにいい、滑稽一兎に跳ねまあああしょう♪

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。